

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530756

研究課題名（和文）子どもの社会的適応を促す—幼児の反動的・能動的制御としつけ方略のダイナミック過程

研究課題名（英文）CHILD ADAPTATION: ASSOCIATION WITH TEMPERAMENTALLY BASED SELF-REGULATION AND PARENTING

研究代表者

佐伯 素子 (SAEKI MOTOKO)

聖徳大学・心理・福祉学部・准教授

研究者番号：80383454

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、幼児の自己制御（意識的に行動や注意を制御する能動的制御と自動的に刺激に反応する反動的制御）としつけ方略などの親の養育態度が就学前の子どもの社会的適応にどのような影響を及ぼすのか、養育者を調査対象とした2年間の縦断研究を通して明らかにすることであった。子どもの自己制御や外在化問題行動は時間的に安定しており、外在化問題を呈する傾向のある子どもに対しては、体罰や脅し、感情的なしつけにつながりやすい可能性が示された。子どもの自己制御は、しつけ方略や対児感情を媒介にして、その後の子どもの社会的適応に影響を及ぼす可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This 2-year longitudinal study aimed to understand how temperamentally based self-regulation (effortful control, i.e. the ability to regulate one's responses to external stimuli; and reactive control, i.e. the disposition to respond to stimulus automatically) and parental attitudes toward child rearing affected the social adaptation of children. The participants were primary caregivers whose children attended kindergarten. The results showed that both temperamentally based self-regulation and children's externalizing problem behaviours were relative stable for 2 years and that children with externalizing problem behaviours tended to facilitate their parents to use strict rearing strategies (e.g. punishment and threat). The implications of the present study were discussed considering the possibility that the social adaptation of children would be associated with self-regulation and parenting.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自己制御・気質・しつけ方略・問題行動・対児感情

1. 研究開始当初の背景

従来の自己制御研究では、状況に応じた行動制御や注意制御など、意図的・能動的な制

御機能を中心として社会的適応との関連が論じられてきた。しかし、自分の欲求を抑え、他者の立場を考慮した社会的行動が求めら

れる場面では、能動的制御だけでなく、刺激に対する反応性や、報酬/罰への感受性など、気質を基盤とした反応的制御に関する個人差を考慮する必要がある。報酬や罰への感受性は、親のしつけ方略によっては衝動性や過度な抑制による内在化問題に発展する可能性がある。また、反応的制御が強く、刺激に敏感であったとしても、能動的制御機能の高さによって適応的な行動を起こすこともできるであろう。社会的不適応に至る過程は、様々な要因が絡み合う過程であると考えられる。しかし、適応に関する研究の多くは、横断的方法によるものであり、日本では、相互作用しあう過程を明らかにする研究はまだ少ない。

本研究によって就学前の制御機能の発達と社会的適応との関連の連続性あるいは不連続性の検証や、反応的制御と能動的制御がしつけ方略などの環境要因とどのように関わり社会的適応につながっていくのか明らかにすることができるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、さまざまな観点から論じられている子どもの自己制御を反応的制御と能動的制御に分け、それら制御としつけ方略などの親の養育態度が、就学前の子どもの社会的適応にどのような影響を及ぼすのか、縦断研究を通して明らかにする。具体的には以下の3点を検討する。

- (1) 就学前の子ども自己制御（反応的制御、能動的制御）、しつけ方略や対児感情と社会的適応との関連を検証する。
- (2) 自己制御や子どもの行動が2年後の親のしつけ方略や対児感情にどのような影響を及ぼすのか検討する。
- (3) 両制御機能や社会的適応の連続性あるいは不連続性について検証する。

3. 研究の方法

能動的・反応的制御という二つの自己制御と社会的適応との関連についての文献研究と次のような質問紙調査を実施した。

首都圏の幼稚園児の保護者に園の先生を通じて調査協力を求めた。参加に同意した保護者に対して、作成したしつけ方略尺度と自己制御、社会的適応に関する尺度からなる1回目の質問紙調査を行った。縦断データを収集するために、同じ調査協力者に再度調査を依頼し、参加に同意した協力者に対して、1回目と同様の質問紙調査を行った。質問紙調査の内容や調査協力者の属性等については、各研究成果に記述している。

4. 研究成果

(1) 気質としての自己制御と社会的適応についての文献研究

Derryberry & Reed(1994)は、Dienstbier(1984)の規範内在化における帰属理論を援用し、気質による帰属の違いについて述べている。自己制御の中でも罰に敏感な子どもは、比較的弱い罰でも、より負感情を経験しやすく、負感情を違反した自分の行為によるものと帰属するため、罰の強さに依存することなく行動を抑制することができる。一方、報酬に敏感で罰への感受性が低い子どもは、負感情を罰せられたことに帰属する傾向があり、罰する者がいない場合には行動が抑制されないこともある。

発達初期に限れば、親のしつけは道徳発達には欠かせない。しつけ方略は子どもの気質的特徴を考慮する必要があるが、力によるしつけはどのような子どもであっても効果的ではない。道徳発達に効果的なしつけは、子どもの行為の結果による影響が適切に説明され(Hofman, 2000)、子どもの不快情動が逸脱行為によってもたらされた他者への被害によると帰属されるよう促すことである。そのためには、子どもの情動覚醒を適度なレベルに保ち、親のメッセージに注目しやすくする(Deinbier, 1984)。また、親によるしつけは発達段階に応じて変化していく必要もある。幼い頃には、親の行動統制は、道徳発達のみならず、子どもの社会化に寄与するが、加齢に伴い、その効果は少なくなる(Kochanska, 1997)。

能動的制御に関わる気質は、道徳的行動の実行と逸脱行為の抑制や、向社会的行動の実行につながる感情、たとえば罪悪感や共感などの感情生起に影響すると考えられる。能動的制御と問題行動、反社会的行動との関連を示した研究は多く、子どもを対象とした研究では、能動的制御の低さによって、外在化問題が起こる可能性が示されている(Rothbart & Bates, 1998; 大内ら, 2008)。また、Kochanskaら(1997)の研究では、能動的制御が低い子どもは、誰も見ていない状況でごまかす傾向があり、ジレンマを含む道徳的認知課題においては利己的な選択をする傾向がみられる。原則的に、規範は、いつ、どこでも、誰に対しても適用され、個人の利益よりも優先され、監視の有無に関わらず、行動を調整することが求められている。能動的制御の違いは、外部からの圧力や監視のない状況において、子どもの行動に影響を及ぼす。また、能動的制御が低い場合に衝動的行動が多くなることもあり、養育者の負担や関わり方も異なると推察された。

子どもの自己制御機能の特徴によって、しつけ方略の効果は異なる。能動的制御に関わる気質は、逸脱行為の抑制や道徳的行動の実

行に影響を及ぼす。子どもの自己制御機能は親の養育態度に影響を与えるとともに、社会的適応とも関連するものと推察された。

[引用文献]

Deinsbier, R. A. (1984): The role of emotion in moral socialization. In C. E. Izard, J. Kagan & R. B. Zajonc (Eds.). Emotion, cognition, and behavior. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 484-514.

Derryberry, D., & Reed, M. A. (1994): Temperament and the self-organization of personality. Development and psychopathology, 6, 653-676.

Hoffman, M. L. (2000): Empathy and moral development: Implications for caring and justice. Cambridge University Press.

菊池章夫・二宮克美(訳) (2001) 共感と道徳性の発達心理学 思いやりと正義とのかわりて 川島書店.

Kochanska, G. (1997): Multiple pathways to conscience for children with different temperaments: From toddlerhood to age 5. Developmental Psychology, 33 (2), 228-240

Kochanska, G., Murra, K. T., & Coy, K. C. (1997): Inhibitory control as a contributor to conscience in childhood: From toddler to early school age. Child Development, 68, 263-277.

大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男(2008): 幼児の自己制御機能尺度の検討—社会的スキル・問題行動との関係を中心に. 教育心理学研究, 56, 414-425.

Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (1998). Temperament. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.). Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development (5th ed.). New York: Wiley. Pp. 105-176.

(2) 子ども自己制御（反応的制御，能動的制御）およびしつけ方略などの親の養育態度，対児感情と社会的適応との関連についての質問紙調査結果

①調査協力者の属性

幼児の保護者 260 名。父親の平均年齢 38. 82 歳 (26-61 歳, SD4. 82), 母親の平均年齢 37. 02 歳 (26-48 歳, SD4. 42), 対象児童の平均年齢 5 歳 1 ヶ月 (男児 108 名, 女児 152 名)。母親の教育歴 (最終学歴が中学校とその他の 4 名を除く) は, 高校 (64 名), 専門学校 (52 名), 短大 (57 名), 大学以上 (70 名) であった。子どもの数は, 1 人が 59 名, 2 人が 137 名, 3 人以上が 47 名であった。

②質問紙内容

a) しつけ方略尺度

戸田 (2006), 立元・坂田 (2008), 東ら (1981) より項目を抜粋し, 新たに作成した項目を加え, 項目分析を行い, 46 項目からなるしつけ方略尺度 (表 1) を作成し, 4 件法で回答を求めた。

b) 反応的・能動的制御測定

CBQ 日本語版 (Kusanagi, 1993) 15 の気質尺度のうち, Gray (1982, 1987) の概念にそって, 反応的制御の報酬への感受性項目として, 「接近・肯定的期待」6 項目, 「衝動性」6 項目を, 罰への感受性項目として, 「不快」6 項目, 「恐れ」6 項目, 「内気さ」6 項目を, 能動的制御項目として, 「集中力」6 項目, 「抑制的制御」6 項目, 「注意の転移」5 項目を使用し, 7 件法で回答を求めた。

c) 子どもの社会的適応の測定

CBCL 日本語版 (井瀬ら, 2001) より, 外在化問題として攻撃的行動 20 項目を, 内在化問題として「ひきこもり」9 項目を使用し, 向社会的行動には, 戸田 (2006) の社会的行動項目の下位尺度「思いやり行動」6 項目を使用し, 3 件法で回答を求めた。

d) 対児感情測定

花沢 (1992) による対児感情尺度を使用した。接近得点 14 項目, 回避得点 14 項目全 28 項目からなる。4 件法にて回答を求めた。なお, 拮抗感情指数得点と対児感情得点とした。

$$\text{回避感情得点} / \text{接近感情得点} \times 100 = \text{拮抗感情指数}$$

表 1 しつけ方略尺度

因子名	項目
誘導的・援助的	子どもが他者をイヤな気持ちにさせる行動をとったときに、相手の気持ちを考えるように子どもに促す
	子どもが他者にいじわるをしたとき、どれだけ相手が傷ついたか子どもに考えさせる
	子どもが他者に悪い事をしたとき、その行動のせいで相手がイヤな気持ちになったことを子どもに伝える
	子どもが間違った行動をした時、子どもと話し合い、理由を聞いたりする
α=.84	子どもが他者に危害を加えそうになったとき、その行動の結果、相手がどんな目にあうか言葉で伝える
	何が良かったのか子どもに伝えながらほめる
	子どもが良いことをしたら、「よくできました」などと、言葉でほめる
	子どもの行動を禁止する際には、その行動が他者に与える迷惑を子どもにわかる言葉で伝える
体罰・脅し	どんなに時間なくても、子どもが良いことをしたらほめる
	子どもが間違った行動をしたら、どのように行動すればよいか教える
	子どもが言うことをきかないと、子どもの手や足をびしゃりとたたく
	子どもが悪いことをしたら、たたく
α=.84	子どもがどうしてもいうことをきかない時には、つい子どもの顔や頭をたたく
	子どもをしつける方法として体罰を利用している
	怒りにまかせて、つい子どもをぶったり蹴ったりする
	感情的になると、つい子どもを押ししたり、突き飛ばしたりする
感情的 / 愛情の除去	子どもが言うことをきかないと、大声でどなりつける
	子どもが悪いことをすると、しばらく口をきかない
	子どもが悪いことをしたとき、自分の気分によって叱る程度が変わる
	感情にまかせて子どもをしかる
α=.78	子どもが悪いことをした時、しばらくの間冷たくしたり、はねつたりする
	子どもが悪いことをすると、「うちの子じゃない」などと、言う
	子どもが言うことをきかないと、「そんなこと言う子は、お母さんの子じゃない」などと言う
	自分のきげんが悪いと、子どもが良いことをしてもほめない
	子どもが悪いことをすると、「そんな子はきらい」などと、言う
	怒った時に、つい子どもに物をなげつける
	子どもが同じことをしても、時によって叱ったり、ほおっておいたりしてしまう
	子どもが悪いことをすると、感情的に怒って言葉で責める

表1 しつけ方略尺度続き	
一貫性のない	買い物をしているときに子どもが泣きさげぶと、つい好きなものを買ってあげる
	はじめは「いけない」と言っても、子どもにねばられると最後には許してしまう
	子どもに何かさせようとしても、子どもが嫌がると途中であきらめる
	子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない
	子どもが注意を引こうとしてめそめそ泣いても取り合わない
物的報酬・罰	やっつけはいいと私が言ったことを子どもがしていても、黙ってみていることがある
	子どもが悪いことをしても、あまりとがめだてしない
	子どもが悪い行動に対して罰を与えると決めても、子どもが嫌がるとやめる
	子どもがすべきことをちゃんとするまで、何回も指示する
	子どもが良いことをしたら、ごほうびをあげる
過干渉・強制	子どもが良いことをしたら、好きなものを買ってあげる
	子どもが良いことをしたら、子どもの好きなことを自由にさせる
	悪いことをしたときには、テレビを見せないようにしたり、テレビゲームをさせないようにする
	子どもに対しては、きまりをたくさんつくり、それをやかましく言わなければいけないと思う
	子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことごとまかにいいきかせる
α=.69	子どもが泣きさげんで自分の要求を通そうとしても、相手にしない
	子どもが自分の言い分だけおりに従わせている
	子どものことは子どもにまかせて、あまり口を出さないようにしている
	α=.68
	α=.55

③結果

a) 親の教育歴、子どもの数、自己制御としつけ方略及び対児感情との関連

母親の教育歴と子の人数を独立変数に、各尺度得点を従属変数とした二要因分散分析を行った。その結果、能動的制御、「体罰・脅しによるしつけ」において、母の教育歴に主効果がみられた ($F(2, 217) = 2.78, p < .05$, $F(2, 223) = 6.05, p < .05$)。多重比較の結果 (Tukey HSD)、大学卒は専門卒よりも、能動的制御が有意に高かった ($p < .05$)。また、高校卒は大学卒よりも、「体罰・脅し」が有意に高かった ($p < .05$)。「体罰・脅し」、「物的報酬/罰によるしつけ」、「過干渉強制によるしつけ」においては、子の人数に主効果がみられた ($F(2, 223) = 3.10, p < .05$, $F(2, 225) = 4.98, p < .05$, $F(2, 224) = 3.06, p < .05$)。多重比較の結果、子の人数が1人より2人の方が、「体罰・脅し」 ($p < .10$) で有意傾向、「物的報酬/罰」 ($p < .05$)、「過干渉強制」 ($p < .05$) でそれぞれ有意に高かった。

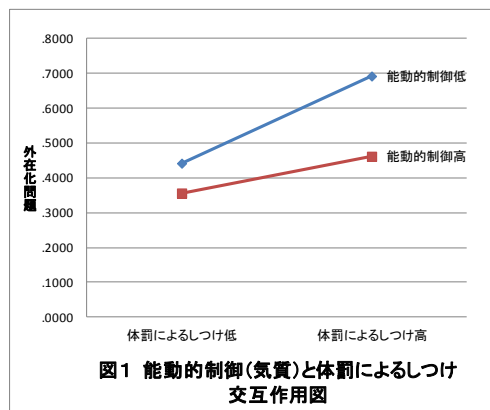
親の教育歴が高いほど、子どもを諭すようなしつけ方略を用いる傾向が高く、子どもの数が多いほど、強制的なしつけ方略を用いる傾向が高かった。

b) 子どもの自己制御と社会的適応との関連に及ぼす親のしつけ方略の調整効果

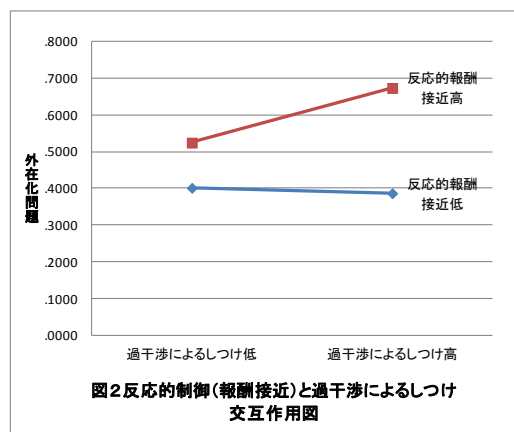
自己制御としつけ方略を独立変数とし、子どもの社会的適応 (外在化問題, 内在化問題) を従属変数とした二要因分散分析を行い、交互作用の有無を検証し、子どもの気質と問題行動との関連に及ぼすしつけ方略の効果について検討した。気質としつけ方略は、各得点の中央値で高低に分類した。

その結果、能動的制御と外在化問題とのつながりに体罰によるしつけ方略の効果が認められた (図1) (能動的制御×体罰によるしつけ $F(1, 223) = 3.34, P < .10$)。意識的な自己

制御が苦手な気質の子どもでは、体罰によるしつけ方略を用いられると、外在化問題が顕在化する可能性が推測された。



また、反応的制御の中でも報酬による接近傾向と外在化問題とのつながりに過干渉によるしつけの効果が認められた (図2) (反応的報酬接近×過干渉によるしつけ $F(1, 233) = 4.27, P < .05$)。新奇な場面に近づくやすく、衝動的な気質の子どもでは、過干渉や強制的なしつけ方略を用いると、余計に外在化問題が顕在化する可能性が推測された。



c) 子どもの自己制御と親のしつけ方略が子どもの問題行動と親の対児感情に及ぼす影響について

子どもの自己制御が親のしつけ方略や社会的適応に影響を及ぼし、社会的適応が親の子どもに対する感情につながると考え、パス解析を行った。その結果は、図3の通りであった。子どもの能動的制御の高さは親の誘導的援助的しつけを促し、子どもの向社会的行動を育む可能性が示唆された。また、反応的制御の報酬接近と物的報酬によるしつけ、外在化問題とは正の関連がみられるが、誘導的しつけと向社会的行動とも弱いながら正の関連があり、反応的制御の報酬への感受性が高くともしつけ方略によっては外在化問題

が抑制される可能性が考えられた。外在化、内在化問題のいずれも対児感情と関連がみられ、子どもの問題行動は親の子どもに対する回避感情を招く。反応的制御の罰回避としてつけ方略とは有意な関連が認められず、内在化問題とは正の関連が認められた。罰に対する感受性が高い傾向をもつ子どもは、過度に抑制的になり、それが内在化問題へとつながるものと推察された。

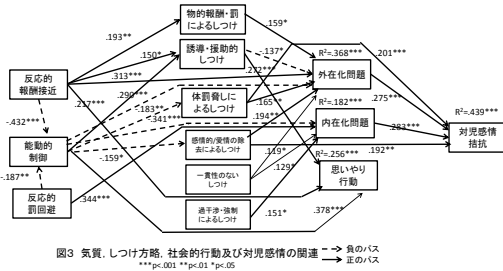


図3 気質、しつけ方略、社会的行動及び対児感情の関連

(3) 自己制御や子どもの行動が2年後の親のしつけ方略や対児感情に及ぼす影響に関する調査結果

①方法

第1回目の質問紙調査に参加し(2011年2月), 2回目の調査に参加同意した保護者に2回目の調査を実施した(2012年7月)。

②調査協力者の属性

1, 2回目とも調査に参加した幼児の保護者42名. 第2回目調査時点では, 父親の平均年齢40歳(35-50歳, SD3.92), 母親の平均年齢37歳(32-47歳, SD3.77)であった。

第1回目調査時点対象児童の平均年齢は, 5歳1ヶ月(3歳8ヶ月~6歳7ヶ月) 第2回目児童の平均年齢は6歳1ヶ月(4歳6ヶ月~8歳1ヶ月)(男児19名, 女児22名 不明1名)であった。

③質問紙内容

研究成果(2)と同様の質問紙内容

④結果

時間的な安定性を検討するために, まず1, 2回目の各変数間の相関係数を算出した。

その結果, 子どもの行動は時間的な連続性が認められ, 特に外在化問題で強い。1, 2回目間の自己制御の単純相関は, 能動的制御では $r = .81$ ($p < .001$), 反応的制御の罰回避では $r = .76$ ($p < .001$), 反応的制御の報酬の敏感さでは $r = .70$ ($p < .001$)であった。2回目の調査協力者が少なく, 結果の一般化に問題はありますが, 子どもの自己制御機能や子どもの行動はいずれも時間的な関連が認められた。また, 自己制御の中でも, 能動的制御の相関係数は高く, 連続する傾向が強いことが示唆された。

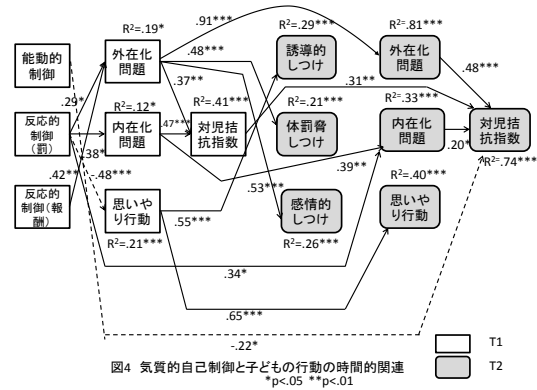


図4 気質的自己制御と子どもの行動の時間的関連

次に, 子どもの自己制御と社会的適応が親の対児感情としつけ方略に影響を及ぼし, それが時間的に連続(不連続)するかどうか検討するために, パス解析(ステップワイズ法)を行った。その際, どの変数とも相関の弱かった4つのしつけ方略は除外して分析した。結果は, 図4の通りである。平成22年に行った1回目の調査時点はT1, 平成24年に行った2回目の調査時点はT2と示している。

子どもの行動の中では, 特に外在化問題の安定性は高く, 外在化問題を呈する傾向のある子どもに対しては, 体罰や脅し, 感情的なしつけにつながりやすい可能性が示唆された。対児拮抗指数としつけ方略との関連は認められず, 子どもに対する否定的感情がその後の養育態度や子どもの行動へとつながることはなかったが, 子どもに対する否定的感情が続く傾向は認められた。

本研究によって就学前の自己制御と社会的適応との関連は時間的な連続性がある可能性が示唆された。子どもの気質としての自己制御機能は親のしつけ方略や対児感情を媒介にして, その後の子どもの社会的適応に影響を及ぼす可能性が考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①佐伯素子, 乳幼児期における道德発達に及ぼす気質と感情の影響-これからの道德発達研究に向けて, 聖徳大学研究紀要 児童学部 人文学部 人間栄養学部 音楽学部, 査読有, 第21号, 2011, 63-70.

〔学会発表〕(計5件)

①佐伯素子・武藤涼華・古屋絵理・長島杏那, 幼児の気質的制御と親の養育態度が子どもの行動と対児感情に及ぼす影響, 日本発達心理学会第24回大会 2013年3月15日 明治学院大学.

- ②佐伯素子・武藤涼華・古屋絵理・長島杏那，
幼児の反応的・能動的制御としつけ方略の
ダイナミック過程(4)－子どもの自己制御
と親のしつけ方略が親の対児感情と子ど
もの行動に及ぼす影響，日本心理臨床学会
第31回秋季大会2012年9月15日 愛知
学院大学.
- ③古屋絵理・佐伯素子・武藤涼華・長島杏那，
幼児の反応的・能動的制御としつけ方略の
ダイナミック過程(3)－父親からのサポ
ート認知と親のしつけ方略が子どもの行動
に及ぼす影響，日本心理臨床学会第31回
秋季大会2012年9月15日 愛知学院大学.
- ④武藤涼華・佐伯素子・古屋絵理・長島杏那，
幼児の反応的・能動的制御としつけ方略の
ダイナミック過程(2)－養育者の属性，子
どもの気質及びしつけ方略と対児感情の
関連，日本心理臨床学会第31回秋季大会
2012年9月15日 愛知学院大学.
- ⑤佐伯素子，幼児の反応的・能動的制御とし
つけ方略のダイナミック過程(1)－子ども
の問題行動及び向社会的行動との関わり，
日本心理臨床学会第31回秋季大会2011年
9月3日 福岡国際会議場.

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐伯 素子 (SAEKI MOTOKO)

聖徳大学・心理・福祉学部・准教授

研究者番号：80383454